市制４０周年

からいも伝来３００周年

郷土芸能大会

出演芸能

10月31日（土）14：00～15：00

・古田棒踊り　　・どすこい

・ヨンシー踊り　　・なぎなた踊り

11月1日（日）

11：00～12：00　14：00～15：00

・安納棒踊り　　・花踊り

・虚無僧踊り　　・獅子舞

・新地節　　・兵児踊り

・横山盆踊り　　・めん踊り

解説　下野敏見先生

（鹿児島純心女子大学教授）

会場　西之表市民体育館広場

主催　西之表市

共催　西之表市教育委員会

西之表市無形民俗文化財保存連絡協議会

芸術文化振興基金助成事業

古田棒踊り（ふるたぼうおど）　古田（ふるた）

由　来

日置郡から安城に移住後、古田に住むようになった上妻次郎氏が、大正１０年、当時青年会員の上妻静馬氏等に教えたのがはじまりである。

その後、毎年古田の豊受神社（とようけ）の願成就（がんじょうじ）の余興として踊り伝えられたものである。

特　徴

棒と鎌との打ち合いが特に激しく勇壮な踊りである。入場・棒突き・踊り１回目・踊り２回目・退場で構成される。

歌やはやしに合わせて踊り，早くて勇ましくテンポのよい踊りである。

歌　詞

1　今こそ参る
　　神に参詣す

2　焼野のキジは
　　岡の瀬に住む

3　オセロが山は
　　前は大川（だいかわ）

4　鎌の柄が折れた
　　三束（さんば）切りおく

どすこい　西之表洲之崎（すのさき）

由　来

今から約１３０年前の江戸末期、今の三重県から洲之崎を訪れた人によって伝えられたといわれ、当時の２５代島主種子島久尚（ひさたか）公の御前でも披露された。

また、大正元年に集団赤痢が発生したときに、病魔退散のお払いとして八坂神社境内で奉納している。

特　徴

「どすこい」は、角力とり節ともいわれ、全島数か所に分布し伝承されているが、洲之崎のものは、歌詞が違い、踊り、歌ともにしっかりしているといわれる。

それは、はじめ島主に見せるため踊ったためだといわれる。

歌　詞

1　日にちゃー毎日　たかせが昇る
　　昇るやー　たかせが一度でくだる

2　嬉しゅやめでたの若殿様よ
　　五葉もやーしごけでせもよけれ

3　ひとせー古松　みどり葉の上で
　　鶴がやーうたえばさんま　亀が舞う

4　稚児の前髪を切らさるならば
　　わしも切りましょう　さんま袖下を

5　つつじ椿は　野山を照らす
　　殿のおめしは　なら照らす

6　障子あくれば角力場が見ゆる
　　明日はどの手でなぐるやら

ヨンシー踊り　現和庄司浦（げんなしょうじうら）

由　来

昔、庄司浦の人々が琉球を旅するうちに、琉球で習ったものを故郷に帰り踊り始めたものであり、その時期は定かではないが、１５０年位前ではないかと思われる。

特　徴

琉球王の御殿を建てるとき、山師が木を切り、村人が運び出し、山方が家材にこしらえ、大工が細工をして、造りあげる様に歌踊りを付けたもの。それぞれの仕事の道具を持って踊り、種子島の他で例を見ない、たいへんユーモラスな踊りである。

２番あり、それぞれに出端、引端がある。

琉球語で伝えられており、庄司浦の人々も、その意味を知らない。

歌　詞

（出端）サー　サー　サー　サー
声はいでずとー　くどいてみましょ（アーヨイヨイ）
さらば　東西　静まり給え(ソラヨーイ　ヨーイ　ヨーイヤナ)
ハリャリャ　コリャリャ　ヤ　ハ　アトセー
西の大殿の　お材木　くだよる（アー　ヨイ　ヨイ）
地引き車で　地を引いてあげて
（ソーラ　ヨーイ　ヨーイ　ヨートヤー）
ハリャリャ　コリャリャ　ヤ　ハ　アトセー
ふゆかち　はやさのか　サイ　サイ　サイ
それとは神妙な　受け声を　受け声
たち声はしとして（アーソーレ）
それなら何でも　語りましょ　ヤレ浜松に
浜松に（アーソーレ）
さぎと鳥が　巣をかけて　小枝を枕に　月をながむるな
※ふいかの　エンヤエイ（アーソーレ）
ヤーコーノ　さんさのエーヤーナー（アーソーレ）
へーばろの　へーばろの　へーばろ　西谷　でーふらせ
色の黒さや　村のはじなるな
※　繰り返し
西方の　西方の　錦のおざいや　雲とたなびくな
※　繰り返し
（引端）えーい　えーい　あやじょ　ほーほみち　ちくよえん
ちょーなさ　エイサー　力を合わせ（ソレ）みなちもそろて
ちおよして　はやしのなー　えーい　えーい　ちひき
おざいもく　西のおやまでん　エイサー　力を合わせて
（ソレ）みなちもそろて　ちおよして　はやしのなー

なぎなた踊り　国上湊（くにがみみなと）

由　来

なぎなた踊りは、口説きもの（親の仇うち）で江戸時代に全国的に流行したものであるが、国上湊にいつ頃伝わったか定かではない。西之表では国上湊と立山（おつや口説き）等で伝承されている。

特　徴

口説きには「団七くどき」「おつや口説き」が多く残っているが、国上湊のものは一場面が「志賀団七口説き」、二場面が「上杉源次郎口説き」からなっており、この「上杉源次郎口説き」は国上湊のみに伝承されるもので、「団七くどき」「おつや口説き」にない哀調をたたえ、独特の雰囲気を持っているものである。

歌　詞

一庭（志賀団七）

（出端）

国は奥州坂田の村よ　与太郎娘のみやなぎ・忍
親の仇の志賀団七よ　尋ね討たんとお江戸に上る
五年この方兵武の稽古　今日が吉日　討たねばならぬ
ヨイヨイヨイ　国は奥州片倉小十郎
小十郎苦にした志賀団七よ　三十一歳長脇差や

（口上）

（女）エイ　いかに団七　御身の手にかけられし与太郎が娘
親の仇じゃ　討たねばならん

（男）エイ　何じゃ　女子供　両人ともに一緒にかかれ
与太郎討ちたるこの太刀で　汝も一緒にしもうてやろう

（斬り合い男女で唄う）

討ちてかかれよ　ハッシと冴ゆる
習いこんだる手裏剣抱いて　両の目にふしと当る
目元くらんで　うろづくところ　姉は陣鎌で
はや討ちかくる
親の仇じゃ今憶えたか　白刃ナギナタで首をかけおといた

（引端）

（女）仇討ちたよ　アラ嬉しさよ　ヨー
親の守りか　その日のげちか　国の殿様　御褒美をたもる
もうは我が家に　ナー帰るはずよエー

安納棒踊り（市指定文化財）安納軍場（あんのうぐんば）

由　来

棒踊りは種子島各地にあるが、いずれも鹿児島本土より明治になって移入してきた芸能である。安納の棒踊りは軍場集落に伝承してきたものであるが、姶良郡加治木町より安納軍場に移住してきた大工石野政蔵氏から習ったもの。

棒踊りの良さは激しい太刀さばきと一糸乱れぬ集団美にある。元来種子島の芸能は優雅でおおらかである点に特色があるが、薩摩示現流（じげん）の気合のこもった棒踊りも、種子島に定着した。

特　徴

・安納棒踊りは、出端、本踊り、引端の四つからなっている。
・島内の棒踊りよりテンポが早く、棒の間に鎌が入っている。

歌　詞

（出端）

おしろが山は前は大川　かたげたつとは
中はにぎりめし

（本踊り）

（1）　焼野のきじは　丘の野に住む
（2）　山太郎ガニは　川の瀬に住む
（3）　清めの雨が　かさにバアラリと

（引端）

やや山ではエーヘンヨー大川

花踊り（市指定文化財）国上寺之門（くにがみてらのかど）

由　来

元来「大踊り」といわれ、太鼓を下げた５０人の男で踊られていたが、寺之門特有に変化してきて、今の形となった。

口碑では、約６００年位前、都の落人が国上の浦田に上陸し、寺之門付近に住み始めた。彼らが都の思い出をこの踊りに託して伝えたといわれる。

特　徴

踊りのテンポは極めてゆるやかで、種子島の踊りの中でも最も優雅といわれている。全体の踊りの根底には、早苗植えの所作で、早苗を象徴とした花を持って踊る。

また、疫病退散を祈る「やすらえ花」、すなわち「花しずめ」の踊りも、更に花祭りの要素も加わって、単純化された中にも気品がうかがわれる。

歌　詞

（出端）初むるなー　すげのお笠にお顔を隠し
三十三間の清水で　七日こもりて
兵武のけいこ　一に手裏剣　二で薙刀よ
三で小刀をすらりと抜いたへ

（本踊）

（1）酒田ヨソナー　千代嬢はなぜ髪や結わぬ
（2）櫛もヨソナー　ないかよ櫛も　ないかよ　油もないか
（3）櫛もヨソナー　ござるよ櫛も　油もひらも手もござる
（4）髪もヨソナー　できたよ髪も　できた島田の髪が
（5）寝夜のヨソナー　行燈　寝屋　行燈　だが来て消やす
（6）様のヨソナー　恋風様の恋風　そっと来て消やす

（引端）京屋大臣五や娘　ハラヤーサーサー
ヤレヤレヤレ　七ツ時からお伊勢に心
ハラヤー　サササー　ヤレヤレヤレ
親にかくれてチョイト抜け参る　ハラヤーサー
親に隠るな　暇くりょ参れ
ハラヤーサー　サササー　ヤレヤレヤレ
ここはどこかと　公家衆に問えば
ハラヤーサー　サササー　ヤレヤレヤレ
踊りゃよいもの　また踊りましょう
ハラヤーサー　サササー　ヤレヤレヤレ
これできりましょ　やめましょエー

種子島の郷土芸能

種子島の芸能

種子島は「民俗芸能の宝庫」といわれるほど多くの芸能が残されている。

かつて、百数十あった民俗芸能も、現在、過疎化による踊り手の減少、生活様式の変化などで、年々その数は減少しつつある。

種子島の民俗芸能は、種子島大踊り（安城踊り）・源太郎踊り等の大踊り、どすこい・なぎなた踊り等の中踊り・小踊り、それに座敷舞・盆踊り・狂言、士踊り・町人踊りなどに区分される。

日本書紀に天武十年（681）「多禰島の人等を飛鳥寺の西の河辺に饗(あ)へき。種々(くさぐさ)の楽を奏(おこ)しき」と記録されており、種子島の芸能の歴史は奈良時代までさかのぼることになる。奈良、平安、鎌倉時代と変遷するにつれて、各時代の各種の芸能が流入し、今日の豊かな民俗芸能の島に発展したのである。

種子島の芸能の多くは、１０月に行われる願成就（豊作を神に感謝する祭）で披露される。

この日は村中総出で料理を持ちより、神社の境内で酒をくみかわし各集落に伝わる民俗芸能を奉納しあい、楽しいひとときを過ごす習わしである。願成就は種子島人の心を表現する農漁村最大のカルチャーフェスティバルということがいえる。

虚無僧踊り　現和上之町

由　来

江戸時代の中頃、薩摩藩領内に虚無僧姿で侵入した幕府方の武士に対し、てんびん棒で勇敢に立ち向かった農民の気概をたたえる踊りで、原形は鹿児島市谷山中山地区に伝わる「中山虚無僧踊り」(県指定文化財)とされている。

現和上之町には、明治35年頃、伊集院出身の上平太兵衛という人が仕事で現和に在住したとき伝えられたといわれている。

特　徴

棒踊りの一種である。棒踊りは種子島の各地に伝えられているが、上之町の踊りは、三列編隊で中央に虚無僧が入る。

歌　詞

1　今こそ参る
　　神にものめい

2　焼野のキジは
　　岡の瀬に沿う

3　山太郎ガニは
　　河の瀬に沿う

4　おしろが山で
　　前は大河（だいかわ）

獅子舞（市指定文化財）　古田

由　来

明治時代の末、大分県から椎茸の栽培のために古田に移住してきた、川野幸太郎、石井又蔵の両氏が地区民に伝えたもの。

大正３年に大正天皇御即位記念として初めて披露され、以来毎年１０月に行われる豊受神社の願成就に御神楽として奉納されている。

特　徴

獅子２人と天狗と猿２人の５人で舞う。

はじめは獅子を相手に天狗が茶化す。やがて獅子が怒って天狗におそいかかる。獅子と天狗の激しい争いが続き、一度天狗が負けるが、やがて活気づき、刀と軍配の巧みなあやつりで、終わりには獅子が力尽きて後退していく。

猿はそれぞれ獅子、天狗側につくが、一定の舞の形はなく、獅子及び天狗の動作をまねしながら、ときどき猿どうし争う。舞の道化役を演じる。

舞終わったあと、獅子は１～２歳児の頭を魔よけのため噛んでやる。

獅子も天狗もかなりの体力が必要であり、この役には青年たちがあたっている。

鳴物は大太鼓、小太鼓（二人で交互に叩く)、横笛で、横笛は古田に自生しているニガタケで作り、手製のもので、貴重なものである。

歌詞はなく、ところどころで「ホース」という掛け声をかける。

新地節　伊関柳原

由　来

明治末から大正末期にかけて、前野家に身を寄せた長崎の源吾という人が、柳原のために作り伝えたものといわれている。

特　徴

非常にテンポが早く、軽快な歌と踊りである。銭の入った筒を持つ、銭太鼓ひとつであるが、ここでは輪になって踊る。

歌　詞

（1）（5）新地土手から小田山見れば
　　アラヨナーなぐれ（アラサイ　コラサイ）
　　お春がかたになう
　　権現山からにせどん来れども
　　わたしゃお前さんに　文などとってかやってか
　　覚えはござらん　ござらん

（2）（7）新地お役人は　この城ぶえん
　　アラヨナー焼かにゃ（アラサイ　コラサイ）
　　食われぬ　夏の魚
　　石垣どんこが顔出した　今朝も出したが　また出した

（3）（8）そろたそろたよ　踊り子がそろた
　　アラヨナー稲の（アラサイ　コラサイ）
　　出穂より　まだそろた
　　ぶんぶく茶釜の　ふた取る間がない
　　かわいいねえちゃんの取り引く間がない　間がない

（4）（9）お菊どんなやつ　だいまさに惚れて
　　アラヨナー主にゃ（アラサイ　コラサイ）
　　子もおる　妻もおる
　　田舎のねえさん　汚れはダテじゃい
　　よごれはダテでも　かんざしゃ銀じゃよ銀じゃよ

（6）河井勝五郎　車に乗ってて
　　アラヨナー引けよ（アラサイ　コラサイ）
　　初花　これまで
　　段々畑のそら豆は　ひとさや走れば　みな走る
　　あたしゃ夜中引いて走る
　　ア　ソンナジャラ　ソコジャラ

兵児踊り　現和西俣

由　来

明治35年頃、宮崎県より丸太という兄弟が椎茸の栽培をするため、現和の西俣に移り住んでいた。この丸太氏が良い踊りを知っているとのことで、それを西俣の若者に教えて欲しいと頼んで教わった踊りである。

特　徴

太鼓の音をトン、拍子木の音をキャッキャーともじって、この踊りを「トンキャッキャー」ともいう。種子島の他の踊りに見られない、一種独特のひょうきんさと滑稽さをもっている踊りである。終わりの引庭はテンポを早めながら、最後の一人が引いてしまうまで繰り返す。

歌　詞

1　和尚さんな　どこへ行く
　後の小僧さんに問うたれば
　はげた頭は　とっくりまわせ　姉さん
　どうしよかな　枕に花御座
　夜着にふとんなあ よかんそう なあしな
　ほんによかんそう　なあしな

2　和尚さんな　どこへ行く
　後の小僧さんに問うたれば
　はげた頭は　とっくりまわせ　姉さん
　どうしよかな　南瓜のごまずり
　どじょうのあんかけ　うまかんそう
　なあしな　ほんにうまかんそう　なあしな

3　おづれ　こだま　おせろ　みかけて
　天馬　天神　みざをすれ
　どうすりゃ小坂は　茶屋　しばや　花の吉原
　船のどいどい　主のねんばい　エンサラサ

横山盆踊り（県指定文化財）上西横山

由　来

寛永５年（1628年）、宮崎県高岡の地頭比志島国隆（島津家家老）は、悪政を理由に種子島に遠島となった。ところが国隆の愛妾であった阿久根出身の千代女は、単身山川より後をおって種子島に渡ってきて、二人は上西横山に住んだ。

翌年、国隆は切腹を命ぜられ、このとき千代女も殉死した。国隆51歳、千代女35歳であった。横山の人々は、二人の死をいたみ、特に千代女の節婦としての心情をしのんで、旧７月７日にその霊をまつり、踊りを奉納するようになった。

特　徴

種子島の盆踊りは、曲も手振りもきわめて静かで荘重、全員がカムキという面（手ぬぐい）をかぶって踊る。カムキは清浄な霊に人の息がかからぬためのおおいであり、同時に踊り手自身が精霊であって、静かな中にも霊への畏敬をこめたものである。

横山盆踊りは、曲がいくつもあって変化していくが、千代女の部分は哀調切々として、人の心をうつ調べである。

歌　詞

（出端）　種子とりてうれし　うえなは　武蔵野の
　しょもくやらん　吾が思い草　茂れ茂れ
　おさまる御代こそ　めでたけれ

（めでためでた）　めでためでたの　御殿屋敷　小倉九ツ
　御門八ツ　船は千艘　御金舟よ　金をおろすは　品川に

（梅が枝）　梅枝や匂いにかげるわが心
　富士のうらばにえおく露 その名　玉かづらかけ　しばし

（鯉の小池）　鯉の小池　浮いたる舟は　銀の白金　櫓こげや
　おしこめと　との浦

（阿久根千代女）　阿久根千代女は　夜舟こぐ
　足もだるんど　手もだるんど　まして夜風も　寒かるど
　寒かるど　寒かるど　まして夜風も　寒かるど
　阿久根千代女は　ちご心　玉章（たまずさ）に
　また唄かえて　花の恋の女に　やると見た　やると見た
　やると見た
　花の恋の女に やると見た 花の恋のおんなのおしゃれごと
　うつつ名の立つ　玉章を　水に浮草　笹の露　坊のとばせに
　舟のりて　あらし待ちたる心して　これも浮世の物語り

（引端）　せんとみやまの　せんとみやまの　奥の入りには
　ちょうと出た　よしわか　ふじはかまきて　見ればたて袖
　長羽織　裾にゃうれし　おがのこに　よしながきみおいた
　おもしろや

めん踊り（県指定文化財）住吉深川

由　来

古くから踊られてきた民俗芸能で、めんを被りひょうたんを腰にぶらさげて踊るところから「ひょうたん踊り」ともいわれる。

めん踊りはいつ種子島に伝来したかは不明であるが、その歌詞より江戸初期ではないかと思われる。

以前は、各家の長男だけが踊り、養子や次男、三男には踊らせなかったという。

特　徴

出端の楽拍子、および時々鳴らす太鼓の調子良さとはうって変わって、メロディーは一抹の哀愁をたたえながら、独特の節まわしで歌われていく。そのメロディー、拍子のコントラストに加えて、全体が統一された芸能となっている。

めんに猿が混じり、道化役を演ずる。哀調とともに滑稽さもたたえ、多分に室町時代頃の芸能の影響も受けていると思われる。

歌　詞

1　金山に　三味線無いとは　誰が云うた
　なればこそ　こま嬢を　乗せてさまやろう

2　新舟と　茶舟が無いとは　誰が云うた
　なればこそ　竹嬢を　乗せてさまやろう

3　七曲り小川ですそがぬれたよ
　小松原入りては　出端も入端も

4　ほんになりたよ　大和様のひょうたんじゃ
　昼は御腰に　下げられて
　キラタンキラタン